

2015 SUPER GT LM-corsa • I N G I N G Race Report 第 7 戦 オートポリス

◆ 11月1日(日) < 決 勝 > 天候:曇りのち一時小雨 | コース状況:ドライ→ハーフウェット

#51 JMS LMcorsa Z4 / 新田守男・脇阪薫一 17位



11月最初の日曜日となった11月1日、熊本県境にもほど近い大分県日田市、阿蘇外輪山の山麓にあるオートポリスでは2015年AUTOBACS SUPER GTのシリーズ第7戦、SUPER GT in KYUSHU 300kmの決勝レースが行われた。サーキットの特性などからチームとしては今回のオートポリス・ラウンドを大きな目標の一つとしており、スタッフ一人一人がモチベーションを高めてサーキットに集合した。マイナートラブルなどもあり、土曜日の公式予選は苦しい展開となったが、それでもQ1を担当した新田守男、Q2を担当した脇阪薫一、2人のベテランが渾身のドライブでタイムアタック。ともに、これまでのコースレコードを更新する好タイムで、クラス11番手のグリッドをゲットしていたから、決勝に向けて

チームの意気は、いやがうえにも盛り上がっていた。

日曜朝のフリー走行でも新田→脇阪のドライバー交替をシミュレーションしながらマシンをチェック、午後の決勝レースに向け備えは充分だったが、その午後の決勝前にトラブルが発覚。幸いにも決勝レース直前のウォームアップ走行が始まるまでには対策も終え、文字通り準備万端で決勝レースのスタートを迎えることになった。

チームの作戦としては、スタートと前半のスティントを新田が担当。後半のスティントを脇阪が引き継ぐ作戦で、新田もスタート直後の混乱に巻き込まれることなくポジションキープでレースを開始した。最初は快調なペースでマシンのフィーリングもまずまずだったようだが、すぐに酷いハンドリングに悩まされるようになる。フロントタイヤに、グレイニングと呼ばれる症状が出てしまい、マシンをコース上にとどめておくのも困難になったのだ。何とか頑張っていた新田だったが、チームはルーティンピットを早目に変更、最低周回数を超えたところで新田をピットに呼び戻した。そして新田から脇阪にドライバー交替、ガソリンを補給するとともに、タイヤも4本を交換する。そして何もデータがないために、新田が履いていたのと同じミディアムを装着して脇阪をコースに送り出している。

ピットアウトして行った脇阪だったが、マシンのセットを変更せず、また最初のスティントで新田が履いていたのと同じタイヤを装着したから、これは当然の結果だが、脇阪もまた、フロントタイヤのグレイニングに悩まされることになる。そしてチームは40周…2回目のスティントでは21周目を走り終えたところで2度目のピットインを実施。よりソフト目のタイヤに交換することを決断した。同じタイヤを装着しても同じ結果しか出ないなら、データがないタイヤをトライしよう！という格好だったが、新しいセットでサード・スティントに臨んだ脇阪は、最後まで快調に飛ばすことになる。

結果的には17位でチェッカーを受け入賞からは程遠かったが、ピットアウトして2周後にマークしたベストラップは、クラス6番手！、FIA-GT3カテゴリーでは何と2番手!! たら・ればを言っても仕方ないが、予選を走ったタイヤでスタートすることが義務付けられているから新田が担当した最初のスティントはともかく、脇阪に交替した段階で、このセットを選んでいたら…。そう思わずにはいられないし、相性が良くないとされている最終戦のもてぎラウンドにも期待が高まっていく。



ドライバー／新田守男

「スタートしてから序盤は良いペースで走れました。それこそ“ワークス”の7号車と同じようなペースでね。でもすぐにハンドリングが酷くなって…。コースにいてだけで精一杯、でした。それでチームと相談してルーティンピットを早くしよう、ということになってミニマム(=規則で決められているドライバーの最低周回数)を走ったところでピットインしました。でシゲ(=脇阪薫一選手の愛称)も最初は同じセット(=新田選手が装着していたのと同じ種類のタイヤ)で行ったから、やはり同じようにグレイニングが出てしまいました。そこでもう1回ピットインして、

今度は別のセットを装着したらすごく良いペースで最後まで走れました。残念というのか悔しいというのか。でもクルマが本来持っている速さは確認できたので、次回また頑張ります」

ドライバー／脇阪薫一

「新田さんは予選で履いたタイヤでスタートしたのですが、グレイニングが酷くて、ピットインを当初の予定よりずっと早めることになりました。それで自分が出て行くときにどのタイヤを着けるか迷いましたが、もう1セットの方はデータがなくて、新田さんが履いていたのと同じセットのニューに履き替えてスタートしました。でもやはり、すぐにグレイニングが酷くなって…。それでもう一度ピットインして、今度は、それまで全然履いていなかった新しいセットのニューに履き替えて再スタートして行きました。そうしたら、グレイニングに悩まされることなく最後まで走れてタイムも悪くなかった。ただ、なぜそうなるのか？ が完全には解明できていないのでね。その辺りも次回への課題になりましたね」

監督／小林敬一

「今回は、もっと(上位に)行けると思っていたのですが…。やはりレースは難しいですね。BMW Z4 はフロントとリアでタイヤ(の仕様)を変えているんです。例えば今回、決勝レースをスタートした時にはフロントがミディアムでリアがミディアムハードでした。それで予選を走って、悪くはないと思っていたのですが、決勝レースで長い周回を走ると表面が、変に削れてささくれだって来んです。これはグレイニングと呼ばれる現象で、そのまま走っていると自然に治って来但也有りますが、今回は治らずにどんどん酷くなって行った。今回はそれがすべてですね。脇阪が2回目のステイントで履いたセットではグレイニングが起きていないから、その辺りもきちんと分析する必要がありますが、それも含めて最終戦のもてぎで、もう一度頑張ってみようと思います。応援して下さい」

